



TITLE:

内村鑑三における信仰共同体の問題

AUTHOR(S):

岩野, 祐介

CITATION:

岩野, 祐介. 内村鑑三における信仰共同体の問題. アジア・キリスト教・多元性 2009, 7: 37-50

ISSUE DATE:

2009-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/74759>

RIGHT:

内村鑑三における信仰共同体¹の問題

岩野 祐介

はじめに

内村鑑三は「信仰とは個人のものである」ということを強く主張した人物である。しかし同時に、文書伝道、講演等を通した社会への働きかけを最期までやめなかった人物でもある。信仰が個人のものであるのならば、何故そのように他者と繋がらなければならないのだろうか。社会に対する手厳しい批判者であり、ゆえに預言者的とも評される内村は、何故社会と関わることを放棄しないでいられたのか。社会およびそれを構成する人間に対して、どのような希望をどこからどのように得ていたのであろうか。筆者の根本的な関心はこのような点にある。

個人の宗教性と社会性との関連という問題は、言い換えれば、神と人間との関係と、人間同士の関係とは、いかに関連しているか、という問題になる。内村においては、この両者のうち、神と人間というラインが重要視される。もちろんあらゆる人間は、現実の社会においては他の人間とともに生きているのである。当然、人間同士の関係も重要である。内村もそれを度外視しているわけでは決してない。しかし、人間と人間、というラインはあくまでも神と人間というラインの後にくる問題とされるのである。² ただし、この二つのラインは各自別々に独立して存在しているわけではない。神と人間というラインにおいては、あくまでも一人ひとりが徹底的に個人として神に向かい合うことになるため、個人主義が強調される。しかし内村において、神と人間との関係は、人間と人間との関係へと開かれていくものである。

個人、共同体、組織

筆者はこれまで、もっぱら神への信仰を媒介とした個人と個人との関係について研究してきた。そこでは信仰という軸が存在するために、個人対個人の関係において、ある個人が支配的な存在となることが防がれているように思われる。故に愛が膨張して義を否定することもなく、また師弟関係や親子関係が絶対服従的なものになるようなこともないようになっているのである。³

では、無教会とは個人の信仰であり、そこにはせいぜい師弟間の縦型の人間関係しかないのであろうか。内村が隣人愛について述べた言葉は、教理的なことであって現実の生活の中では無関係なのであろうか。そんなことはない。それはやはり、信仰を共にする仲間の中で共有され、さらにその外へと広がっていくはずのものである。「愛の波動」において内村が次のように言う通りである。

「或人神の愛に感じ、之に^{はげ}励まされて我を愛せり、我其人の愛に感じ、之に励まされて或る他の人を愛せり、彼また我愛に感じ、之に励まされて更らに或る他の人を愛せり、愛は^{はきう}波及す、延びて地の^{はて}極に達し、世の終に至る、我も直に神に^{たぢ}接し、其の愛を我心に受けて、地に^{は どう}愛の波動を起さんかな。⁴」

このように、内村においては、個人と神との関係をもとにして、個人と個人との関係が成立するものと考えられている。となれば、さらにそれらがお互いに繋がり、重なり合っ
て組織的なものが成立していくことになるとも考えられるのではないだろうか。つまり、内村は組織的なものの根底に個人を置いているのである。

本論文では、一対一、個人対個人という関係からさらに広げ、共同体的なもののあり方についての、内村の思想の内実を明らかにすることを目的とする。なおここで述べる共同体とは、組織的なもののうち、より規模の小さいものを指している。つまり具体的な各個の個人と、ある意味で抽象的・曖昧なものである社会・世界との間に存在し、それらを繋ぐものとしての意味である。個人のネットワークとしての集まり、共同性といったものが想定される。

組織的なものに関する内村の理解における問題性としては次のようなことが指摘できる。すなわち、個人と組織的なものとを対比した場合、比較的規模の小さいような中間的な組織までをひっくるめて全体的・一般的に「組織」として把握し、それらに、自己目的化した個人の自由を圧殺するような性格を見出していることである。内村の教派教会批判の基本線もまたここにある。

しかし個人と、例えば国家のような規模の大きい組織社会との間には、階層的な距離があるはずである。政治制度という面から考えれば、国家と個人の間には市町村がある。「世間」のような漠然としたものを考えても同様であろう。個人がいきなり「世間」と対決するようなことには、一般的にはならないはずである。内村がその生涯の中で関わった、行政府、学校、教会といったものは全て本来、大規模な組織と個人との間の、中間的性格をもつ組織であるはずなのであり、それらは常に個人を抑圧するだけのものではなかったはずである。むしろ大規模な組織により個人が圧殺されないよう、個人をまもるものとしての性格もあるのではないだろうか。

不敬事件における内村がまさにそうであったように、個人が個人だけで組織（あるいは組織に飲み込まれた個人の集団）と立ち向かうのは極めて困難なことである。個人の独立、自由といったことを容認し、むしろそれら個人を強めるようなあり方の組織、集団が、そこには必要となってくるであろう。そのような個人と大規模な組織の間に介在するものとして、中間的な組織が働く場があるように思われる。そのような組織は例えばキリスト教の教会のような、国家を動かす原理とは別の原理としての信仰に基づく共同体であるように

思われるのである。

この、中間的に介在するものとして個人内村を「世間」から守り、調停すべき役割を教会に期待できなかったことは、内村における組織的なもの一般への懐疑が教会にも向けられていることの理由ともなっているのではないであろうか。その場合、国家と教会という関係において、教会が教会の独立・自由を保ち得なかった、と判断することも可能であろう。

このように不敬事件を通して中間的な組織による支持あるいは保護を得られなかった内村は、自分対自分以外のすべて、とでもいうような苦しい状況に追い込まれたのであった。しかし、個人は自分の見える範囲しか、具体的に対象として把握はできないのである。事態としては、社会、世間と内村とが直接向き合いぶつかり合うということは、起りえないのである。具体的に内村を批判攻撃したのは、一高での一部同僚であったり、一部学生であったり、あるいはマスコミの煽動にのせられた一部の人々であったりしたはずである。つまり、世間や社会を代表する形での個人、およびその集まりが、内村を非難攻撃したのである。そうであるならば、内村が批判するのは、そのような形で本当に何が重要な問題であるかを個人として考えようとせず、大勢に従うような形でふるまう、組織に飲み込まれた個人である、とすることができるのではないか。そのように考えれば、組織の問題は組織の中の個人の問題、組織を構成する個人の問題である、ということにもなる。内村が個人の問題に収斂しようとするすることには、一面の妥当性はあるのである。

では、このように、組織的なものに対する警戒心を持つ内村が目指した、信仰に基づく共同体像とはいかなるものであったろうか。まずは内村の無教会主義についてとりあげてみたい。

無教会主義

内村が無教会というあり方をとったことに対する評価は様々である。日本独特のキリスト教形態として評価されることもあれば、教会の歴史性に対する無理解として批判されることもある。教派教会の伝道活動がなければ内村が全ての根本とする聖書もまた日本に伝わらなかったわけであるから、この批判はある意味で妥当なものであると言える。しかし、詳しくは後述するが、内村はこの問題を全く理解していなかったわけではない。

この「無教会」とは、明快なようでいて実は複雑な要素を含んだ概念である。端的に無教会＝教会否定ということはできない。「無教会とは、教派的組織なのか、運動なのか、それとも思想・理念なのか」、という問いに対して明確な答えを導き出すことは困難である。現実的に即して見た場合、教派的組織として無教会主義を展開している人々がいる一方で、他の教派教会等に所属しつつ、その枠を超えた形で無教会主義、あるいは無教会主義的な運動を展開している人々もいる。両方のあり方があるのであるから、無教会とはそれぞれの要素を含むものであるとしか言いようがないであろう。

これまでの無教会主義研究は、主として無教会主義と教派教会との違いに焦点をあてた

ものが多かったように思われる。しかし、聖書に基づいてキリスト教を伝道するという意味において、またキリストを頭と仰ぐ共同体であるという点において、当然ながら無教会主義にも教派教会との共通点があるはずである。無教会をその集団としての構造・特徴の面から分析研究したものとしては、古典的なものとしてカルダローラ⁵によるもの、近年ではマリNZ⁶によるもの等がある。カルダローラの研究は社会学的な研究手法により無教会を扱った最初のものとして重要である。しかしカルダローラは、ここで無教会というものを、ひとつの教派的なものとして捉えているようにも思われる。マリNZは新宗教研究の手法を生かして無教会の研究を行っている。しかしここでも、無教会はある種の教派的なものとして捉えられているように思われるのである。

ところが内村は、無教会は固定的な教派のようなものになるべきではない、と考えていた。その後現在にまで至る無教会主義に教派性があるのは確かであるが、しかし教派的な把握だけで内村の共同体像を明らかにすることは難しい、と言えるのではないであろうか。前述のように、無教会とは複雑な概念だからである。

そこで以下では、内村がキリスト教思想的なよりどころとする聖書に基づき、いかなる共同体像を抱いていたか、を明らかにしていきたい。

無教会と教会

内村が最初に「無教会」という表現を用いたのは、1892年刊行の『基督信徒のなぐさめ』⁷においてである。^{*} ここでの「無教会」とは、すなわちどの教会にも属していない状態、との意味である。内村がこのような無教会状態になったのは、端的には不敬事件のためである。欧米教派からの政治経済的独立を目指していた日本の教派教会は、「国賊」扱いされる内村を表立って擁護することが難しかったのである。よって内村は教派教会から意図的に離脱して無教会となったのではない。もっともこのように教派教会に所属しない形となって、組織とのしがらみがなくなり、自由な発言ができるようになったことは確かである。内村は遠慮することなく教派教会がもつ問題性について批判することができた。

内村が教派教会を手厳しく批判したのは確かである。しかし、内村は教派教会の存在を否定はしていないのである。それらがあってはならないものだ、と考えてはいない。内村は、重要なことは福音伝道である、と考えているのである。よって、その目的を果たすのであれば、それが教派教会であっても、そうでなくてもよい、ということになる。実際に、教派教会を離脱して内村のもとで伝道に従事したいとの願い出が「東京附近の或る教会を牧する牧師」から寄せられた際には、「小生が君に就て望む所は君が現在の地位に在りて君の最善を試みられんことに御座候」と述べる「脱会諫止の書翰」⁸を送っているのである。また「如何に確信のためとは言へ、永らく世話になりし個人並に団体に対し、尽すべきの義務を尽さず、還すべきの負債を還さずして之を去るは普通のゼントルマンとして為すべからざることゝ存候」とも述べており、信仰における確信を現実化する上で生じる現実的な問題を無視しているわけではないことが見て取れる。

またこの出来事とはまた別の際においてではあるが、「真正の無教会信者」とはいかなるものか、とのテーマで「教会を出づるも可なり、然れども…教会に在りし時よりも^{より}於謙遜にして、^{より}於多く兄弟を愛して、然り、^{より}於多く教会を援けて我等は真正の無教会信者たるを得るなり」⁹と論じている。教派教会もまた内村の隣人愛の範囲に含まれるのである。

この点において、内村と弟子たちの一部との間で見解の相違が生じたこともある。その活動の後期、内村が札幌独立教会への援助に力を入れたことに関して、一部の弟子たちは、無教会主義を標榜する内村が教会を援助することは矛盾であると批判したのである。このような弟子たちの態度が無教会主義の教派化に繋がると考えた内村は、上述のような、教会か無教会かということが最も重要なことなのではない、という自らの論をくり返し述べている。

そこで続いては、内村が信仰に基づく共同体としての「教会」が、いかなるものであると考えていたか、を見てみたい。

本来の教会

内村は1910年の「エクレージャ（教会と訳せられし原語）」において、教会の本来の姿を次のように述べている。

「…イエスをキリストと認むる自由意志の発動的認識より¹⁰出づる愛の信仰を基礎としてキリスト独特の霊的会衆を作るべしとのことである、…」^{*}

内村はマタイ 16:18「わたしはこの岩の上に私の教会を建てる」をこのように解釈するのである。このイエスの言葉は、イエスをキリストであると告白するシモン・ペテロの言葉を受けたものである。よってその上に建てられる教会は、自由意志に基づく信仰告白によるものであることになる。さらにここで用いられている、「『建つべし』と訳せられし原語 oikodoms」には家庭建設の意味があるとして、キリストが求める教会は「家庭に類したる兄弟的団体」であるとするのである。

「我れ我がエクレージャを家庭として建てんと、何んと麗はしい言葉ではないか…温かき家庭の如きエクレージャ……（引用者注：この……は引用者による中略を表すものではなく、原文にあるものである）其建設がキリストの目的であつたのである」¹¹^{*}

このように内村によれば、キリストの愛にもとづく温かい関係が本来の意味での教会なのである。とすれば、それを失ってしまった場合、教派教会は批判対象とされることになるのである。この温かい関係の喪失は、具体的には以下の二つの点であらわれるとして批判されている。一つは前述したような、組織的なもの一般のもつ性質としてである。そしてもうひとつが教派性のもつ性質としてである。この二点が内村の教会批判の理由である

ことは、その活動の期間を通して大きく変わってはいない。

教派性の問題については後に詳述することとして、ここでは組織的なもの一般についての批判についてしておく。組織的なもの一般に見られる問題として内村が指摘するのは、大きく言って以下の二点である。一つは、度々言及した、個人の自由・独立を抑圧するという要素である。明治期の、日本、という状況において、どの程度「個人」の「自由」「独立」が認められていたか。そのことを考慮に入れると、内村の態度は確かに極端ではあるが、同時に内村の先駆性を示すものであるとも言えるであろう。もう一つは、組織的なものには、その本来の目的から外れて組織そのものの維持発展を自己目的化しやすい面があるということである。本来民意を反映するはずの国會議員が、一度議員となればその立場を守ることに熱心になるように、個人を生かすはずの組織もそれが固定化すると個人を圧迫するものとなりうるのである。このことは教会にもあてはまる問題である。教会が本来の目的である伝道から外れ、教勢の拡大に走り、あるいは献金額の増加を第一とするようなこともありうる、と内村は考えるのである。そこまで極端なことがなくとも、例えば社会福祉事業を展開するうち、伝道ではなくその事業が教会の主目的となるようなことが起こり得る、として内村は警戒する。これは教会による社会参加の否定ではない。しかし教会の存在する目的は福音伝道である。それら社会参加もまた、神の恩恵への応答としてなされるべきなのである。

教派性の問題

一方、教派性という面について内村が指摘する問題については、内村のテキストに即して検討していくことにする。

まず、内村による教会観の内容がはっきり現れたテキストとして、「教会問題」を取り上げることにする。この「教会問題」は 1904 年内村が『聖書之研究』で発表した文章であり、後に他の「問答」形式の文章と合わせて『基督教問答』として一冊の本にもまとめられているものである。この『基督教問答』には内村による基督教入門書としての性格があり、内村の思想の基本線をつかむためにふさわしいテキストであるといえる。なおこのテキストは問答形式になってはいるが、問う者も答える者も内村であり、実際に寄せられた質問に内村が答えているわけではない。内村はここで「問ふ者は教会信者の一人なりと仮定す」¹² * としている。ただし、ここで想定されている教会信者の立場は、決して攻撃的で偏見に満ちたものではない。問答は、誤解を解きほぐそうとの態度で論述されている。

教会の本質について

内村は先にも確認したとおり、聖書を根拠として、初期の教会への言及を通し教会の本質について次のように述べる。

「基督教会は基督に託りて聖霊を以て新たに生れたる者の生活的団躰であります、故に

是れは靈的団躰でありまして、会堂とか、会則とか、制度とかいふやうな形躰を以て顯はさるべき者ではありません、…」¹³*

「夫れ神の國は爾曹の衷に在りとキリストの言はれたのは彼の教会に就て言れたのであります（路加伝十七章廿、廿一節）、如何なる地上の教会でもパウロが言ふた教会はキリストの身躰なり、万物を以て万物に満しむる者の満さる所なりとの言葉に適なふものはありません（以弗所書一章廿三節）、…活ける神の家は聖靈の宿る信徒の心であります、亦斯かる心を授けられた者の目に見えざる靈的交際であります、…」¹⁴*

このように、教会とは制度ではなく、靈的な集いなのである。そしてこの理念は、歴史的に変化発展していくようなものではなく、絶対的な本質として、普遍的なものでなければならぬと内村は考える。それでは歴史的展開に意味はないのであろうか。続いては歴史性の問題を確認してみたい。

歴史的特殊性と、自由の問題

内村は教派教会の歴史的特殊性について、次のように述べる。

「御承知の通り地上の教会は天に在る理想の教会とは違ひ、歴史的の性質を有つものがあります、…羅馬天主教会とは中古時代の歐羅巴の境遇に依じて起つた者であります、カルビン主義の長老教会なる者は十六世紀の思想ならびに社会の必要に強ひられて起つた者であります、…故に若し二十世紀の日本国に教会が有るとしますれば、それは千五六百年前に歐羅巴に起つた天主教会であつてはなりません、又四百年前に瑞西国ゼネバで起つたカルビン教会であつてはなりません、…それは今日の日本の信者が基督教の真理を心に受けて、深く神の救済の恩恵を味ふて、其結果、外部より何の制せらるゝ所なくして自然に出来た教会でなくてはなりません…」¹⁵*

「…爾うして斯かる教会（引用者注：日本とは異なる背景をもつ外来の教派教会を指す）に身を置きますれば我が信仰も自づと其不自然の性に侵され、竟に自由の発達を遂げ得ずして、死するとまでには至らずとも、その変形矮縮は到底免れ難いことであります、私は私の信仰の自由発達を計らんがために外来の既成教会に身を置かないのであります、…」¹⁶*

このように内村は、教会史上の歴史的展開は、それぞれ特定の歴史的な状況を背景として生じたものである、と考えるのである。よって、それら特定の歴史性に由来する、欧米の教派教会が備える特殊性は、それらの歴史性を共有していない日本の状況にはそぐわないものとされる。欧米由来の教派教会にはその中に欧米の歴史・文化に依拠した要素が（しばしば無自覚に）含まれており、日本の状況において軋轢を生じることもある。この問題は、日本の文化伝統に十分な敬意を払おうとしない宣教師に対する内村の批判とも重な

っている。例えば、社会における宗教といえばほとんどがキリスト教であった当時の欧米より来日した宣教師にとって、他宗教における信仰のあり方を学ぼうといった態度は無意味なものであった。異教は否定されるものでしかなかったのである。しかし内村は、一部の仏教僧の信仰には学ぶべきところがあると考えていた。ある意味で同じ歴史・文化を共有する信仰の友であるからであり、また同じ日本文化になじみ日本語を話す相手に伝道していこうと考える上で、仏教徒を完全否定することは有効ではない。この意味で、内村は歴史性を理解していないわけではない。内村は、日本では日本独自の歴史性を積み上げていかなければならないと考えているのである。またそれが成功しているか失敗しているかについて、海外の教派指導者から判断される謂れはないと考えている。

これらの意味において、教派教会批判は、ナショナリズムと関わってもある。例えば、アメリカ合衆国の「物質主義」「商売根性」に対抗させるべき高潔な理念として、日本的な武士道を挙げる、といった具合である。¹⁷ * もちろんここで示される内村の伝統理解が非常に理想的かつ理念的・抽象的であることは否定の仕様がなない。それはキリスト教信仰を通して理想化された伝統理解なのである。しかし現実には飲み込まれることなく、かつ現実には背を向けることもない内村のあり方を、「ふたつのJ」に象徴的に表された、キリスト教信仰を通じた日本理解が支えていたこともまた確かである。

また、教派性には党派性としての性格がある、と内村は考える。ここで用いる党派性とは即ち、自分たち以外の教派を敵視する、ということである。カトリックはプロテスタントを、プロテスタントはカトリックを、あるいは他のプロテスタント教派を、競争相手として、あるいはもっと露骨な場合には敵として扱う。もちろんそこにはそれなりの歴史的事情がある。しかし、一方で教会は本来「唯一の使徒的な公同の教会」ではなかったか、と内村は批判するのである。教派性のためにそれがなされないのであれば、その教派性を考え直すべきであるだろう。

もちろん、既成教派をこのような、その歴史的特殊性故に閉じていて、さらなる変化を拒むものである、となかばきめつけるような内村の態度は確かに独断的であり、問題がある。しかし逆にいえば、内村がその種の批判を繰り返しているということは、それら教派教会に、内村の、そしてその他の外部からの批判に対して閉じたところがあるということでもないのではないだろうか。¹⁸ *

内村は、宗教は個人の自由な信仰に基づき、発展すべきものであると考える。絶対的な本質としての「基督に託りて聖霊を以て新たに生まれた者の生活的団体」であることを保ちながらも、歴史的に自由に発展していくものなのである。この、本質を保ちつつ、自由に発展するというあり方が困難なものであることは内村も理解している。よって彼はこれに対する批判を想定し、問答の中で批判に対する応答をしている。想定された批判の一つは、「無教会信者の最大欠点は此兄弟的和楽の欠乏にあると思ひますが、如何ですか」¹⁹ *
 というものであり、もう一つは、制度も教則もなく「如何して教理の純潔を守ることが出来

前者の質問が問うている内容は、無教会主義が個人の自由を重んずる結果、信徒相互の連帯、調和といった面で教派教会に劣る面があるのではないか、との問題であるこれについて内村は、救済とはあくまでも個人の問題である、と言おいた上で、教派教会の内部でも必ずしも会員間の一致があるわけではないこと、教派間となるとさらに一致が難しいことを挙げて反論している。この問題については、キリスト論と絡めて教会を論じた別のテキスト「教会とキリスト」を用いて詳しく後述したい。

一方後者について内村は、教派教会の間でも教理的解釈の面で様々な問題があることを挙げた上で（事実、新神学問題や福音主義論争といった問題は教派教会の中での問題であった）、教理は教則ではなく「神の能力」「愛の能力」によってのみ守られるものである、と言う。確かにこの解釈にもまた極端な面があることは否定できない。しかしここで内村の言う「信仰は直に神より来る」ということは、各信仰者個人が直接聖書を通して神と向き合う、といったことであるように思われる。内村は神との直接的関係、ということを作り返し述べる²¹が、それは神秘的合一といったことではないのである。そこにはつねに聖書を読むことを通して、ということがあるのであり、内村が『聖書之研究』誌を通して独立伝道を行ったということは、信仰者各自がよりよく聖書を理解できるようにすることが福音伝道のためには不可欠である、との意識があったからであると思われる。個人的神秘体験とは異なり、共有する可能性のあることなのである。続いて、この共有可能性、あるいは他者にかかれてある信仰と信仰共同体の問題を、内村がキリスト論と関連して述べた「教会とキリスト」を用いて検討することにする。

開放性について

内村は「教会とキリスト」において、キリストは教会から解き放たれねばならない、と主張している。これは、神が全能、無限であるならば、キリストの救済が特定の場所・組織にかぎられるはずがない、との考えによるものである。

「…義の太陽なるキリストは何々教会と云ふやうな、其んな狭い穴の中からのみ覗くことの出来る者ではない、彼は宇宙丈けそれ丈け広くある、…」²²*

そして、特定の宗教教団としてのキリスト教、教派教会にそむき、あるいはそれらと一線を画しながらも、実際にはイエス・キリストに倣おうとする人物が存在したことを実例として述べるのである。例えば詩人シェリーについて、内村はこのように説明する。

「…彼は公然自から称して無神論者であると云ふた、然れども彼れと同時代の英国人にして彼れに優さりて正義を愛し、人道に忠実なる者はなかつた、彼の理想とせし所は全然イエスキリストのそれであつた、…」²³*

そして以下チャールズ・ブラッドロー、スティーヴン・ジェラード、トマス・ペイン、J. S. ミル、スペンサー、フレデリック・ハリソンといった名前が、教派教会とは敵対しながらも「イエスキリストの敵であるとは思へない」人々として列挙されている。このことから、教会員であるかないかは別の次元で、イエス・キリストに倣うということができると内村が考えていたことは明らかである。そして教派教会があるからこそ、これらの人々はキリストに倣うものでありながら反教会の立場をとらざるを得なかった、ということになる。

さらに内村は続けて、教会の合同は困難であるが、独立した個人としての信徒同士の合同であれば可能である、と述べる。

「…真個（〔まこと〕）真個の一致は各自が独立の人と成る時に来る、人が自己以外の者に由て立たんと欲する時に分離と嫉争とは免れないのである。」²⁴*

「…広い人とは孤独の人である、我等の主イエスの如くに、身を寄するの教派もなく、保護を頼むの党派も無い人である、斯かる人に宇宙的の同情がある、人類的の愛心がある、…」²⁵*

このように、単独であることにより、すべてのものの友であることができる、と内村は考える。単独であることと、周囲と断絶し孤立していることとは違うのである。そして、そうであるならば、独立的共同体である無教会もまた、誰に対しても開かれ、また他団体とも対立することなく、「友」であることができる²⁶* はずである。このように考えれば、無教会は決して消極的なものではなくるとともに、制度としての教派教会の中でも外でも、どこでも無教会的なあり方ができる、ということになるのではないであろうか。教会の本質は聖霊を宿す個人の心であるのだから、それら個人が集まる所には本来の意味での教会、あるいは無教会が成立していることになるのではないかと考えられるからである。

以上、内村の教派教会批判より、次のようなことが言えるように思われる。

教会批判がなされねばならないのは、教会に支配的・権威的である等の問題があり、そのために個人が自由のもとにキリストに倣おうとしてもそれが制限されるような場合においてである。逆に言えば、教会のあり方が変わっていたり異なっていたりした場合は、教会を強力に批判する必要はないということになるのではないだろうか。内村の時代、教派教会の側からは、内村の無教会主義を容認するような動きは少なくとも公にはなかったように思われ、それがさらなる内村の教会批判をよぶようなマイナスの相互作用があったようにも思われるのであるが、状況が変わればことさら教会を批判する必要はないのである。さらに、キリストに倣うということが教会に属するかどうかとは別の問題であるのならば、主義としての無教会を標榜することもまた必要ないかもしれないのではないだろうか。

まとめに代えて

内村の時代、日本の教派教会が組織としていまだ弱体な段階であったため、教派、宣教師が教会を管理運営する必要性から、個人を圧殺するような性格があったことは確かであろうし、現代でもそのような側面は完全にはなくなっていないのかもしれない。しかし現代、状況は変わりつつあるのではないであろうか。カトリックにおいてすら信徒職ということが提唱されるようになっており、信徒の役割、各個人の内面的な信仰の意味ということが重要視されるようになってきている。また、教派間の関係性においても、多様性の中でのゆるやかな一致ということをより積極的にとらえる方向へ、宗教世界・キリスト教世界として向かっていこうとしている時期ではないだろうか。

神を信じ、キリストの愛と義を実践する場が教会である必要がないのであれば、そのような無教會的信仰をあらわす場も特定の集団・集会としての「無教會主義聖書研究集会」である必要は、ないのではないか。無教會が「無」「教會」であるならば、さらに「無」「無教會」、「無」「無『教會』」であることは可能なのではないであろうか。それにより、教派の枠、あるいは教會・無教會の枠を超えた共同性をもちうるのではないだろうか。隣人愛が実現されるような社会におけるキリスト教は、そのようなゆるやかで幅広い面をもっていなければならないようにも思われるのである。

内村の無教會主義における組織化の拒否とは、固定的な組織の拒否ということであって、それが変化し成長する可能性があるのであれば、つまり組織が組織として閉じられてはいないで開かれているのであれば、容認されるのではないか。現実の・現在の無教會は、相互に交流を計り、発展していこうとする方針であるように思われる。また弟子たちに独立して聖書研究集会を開くようにすすめた内村のあり方は、組織化（固定化）をせずに発展していく一つの方法であるといえる。状況に対応し、独自に歴史性を積み上げていくことを目指すのであれば、教派教会との積極的な共存を考えていくこともあり得るであろうし、NCCのようなエキュメニカルな教派間組織と関わっていくといったあり方も考えられるのではないであろうか。それは内村が主張した自由／独立を重んずる無教會主義と、決して外れるものではないように思われるのである。

注

1* 信仰共同体という用語は一般的ではものではないのであるが、「教會」という用語は既成教派教会を想起させる力が極めて強いように思われるため、敢えてこのなじみない用語を用いている。よりよい表現があったらご教唆願いたく思う。

2* 内村の言動にしばしば矛盾があるように見えるのは、一つにはこの問題があるからである。例えば内村による愛についての言及においては神の愛（及び、神の愛を受けたことによる

人間の愛)について述べる場合と人間の愛(人間同士の愛)について述べる場合とがある
のであるが、内村はそれらを用語上区別せず、同様に「愛」と記す。そのため、矛盾があ
るよう見えるのである。

この意味において、内村の基本的な思考法を二元論的と指摘した土肥昭夫は正しい。神
との関係と人間同士の関係という二つのラインにより内村の論は展開しているからである。
ただし、この二つのラインは、永遠に交わらない平行線であったわけではないようにも思
われる。

3* 実際の内村が家族関係や師弟関係の中で絶対君主のように振舞っていなかったか、という
ことは、とりあえずこの問題とは別の問題として考えたい。内村の思想を思想として考え
たいということであって、それを内村が実行具現化できていたかどうか、ということは別
の問題であるように思われる。

4* 内村鑑三「愛の波動」、1905、『内村鑑三全集 13』、203 ページ。(『内村鑑三全集』1980-84、岩
波書店刊。以下、『全集』と表記する。)

なお内村の文章にはしばしば各種の傍点やゴシック体等により文字が強調されている個所
があるが、本稿の引用では、それらの強調は再現していない。また、基本的に旧字体をそ
のまま用いた。

5* カルダローラの研究については、その著書『内村鑑三と無教会』(田村光三他訳、1978、新
教出版社)を参照した。カルダローラはここで、無教会の非制度的性質の故に信仰者各個
人を対象として調査を重ね、それを重ねる形式をとっているため、単純に教派的把握をし
ているということとはできない。しかし、彼は「無教会主義の信仰者」という形で線を引い
ているのであるから、広がりを持つ運動として捉えようとしているとはやはり言えないの
ではないだろうか。また、カルダローラが調査した 1970 年代半ばと現在とでは、無教会の
状況は(教会を含む日本のキリスト教すべてに当てはまることであるが)大きく異なっ
ていることも否定できないように思われる。

6* マリンズの研究については、その著書『メイド・イン・ジャパンのキリスト教』(高崎恵訳、
2005、トランスビュー)を参照した。

7* 内村『基督信徒のなぐさめ』1939、岩波書店、岩波文庫、55 ページ。

8* 内村「脱会諫止の書簡」1910、『全集 17』、262-3 ページ。

9* 内村「真正の無教会信者」1913、『全集 19』、421 ページ。

10* 内村「エクレージャ (教会と訳せられし原語)」1910、『全集 17』、207 ページ。

11* 同前。

12* 内村「教会問題」、1904、『全集 12』、101 ページ。

13* 同前、105 ページ。

14* 同前。

15* 同前、109-110 ページ。

16* 同前、110 ページ。

- 17* 例えば内村「武士道と宣教師」(1908、『全集 15』、431 ページ)、「武士の模範としての使途パウロ」(1920、『全集 25』、362-363)等でこのような主張が展開されている。
- 18* このことは、教派教会が完全に内村のやり方を否定し、一切耳を貸さない、といった事態ともまた違っているように思われる。というのも、内村の読者には教派教会に属するものもまた多くいたと考えられるからである。
- 19* 前掲「教会問題」、116 ページ。
- 20* 同前、119 ページ。
- 21* 内村における直接性の問題については、八木誠一「内村鑑三における直接性」(2006、『内村鑑三研究 第三十九号』、キリスト教図書出版社)に詳しい。
- 22* 内村「教会とキリスト」1911、『全集 18』、184 ページ。
- 23* 同前、185 ページ
- 24* 同前、189 ページ。
- 25* 同前。
- 26* 内村「単独の幸福」(1920、『全集 25』、580 ページ)等でも同様な主張が繰り返されている。

(いわの・ゆうすけ 関西学院大学神学部助教)

